

乳幼児クラス(〇・一歳児)における染色活動の実践と可能性

佐々木和也・本田 泉・増淵佐和子・木村 厚志

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第5号 別刷

2018年8月3日

乳幼児クラス(〇・一歳児)における染色活動の実践と可能性[†]

佐々木和也*・本田 泉**・増渕佐和子**・木村 厚志**

宇都宮大学教育学部*

社会福祉法人陽向 陽だまり保育園**

子どもを取り巻く環境は「三間(時間・空間・仲間)の喪失」が示唆しているように、子どもの普遍的な成長に欠かすことができない自然や地域そして人とといった環境が乏しくなっている。最近では、人間関係や生活におけるゆとりといった「隙間」、生活の三要素といわれる衣食住をはじめとしたモノやコトに「手間」をかけないといった指摘もなされており、まさしく「五間の喪失」が幼児期から学童期にかけて人らしく発達する遊び環境を変容させてしまっている。本論文では、保育園における染色活動として伝統染色を取り入れ、自然とのかかわりを保ちながら衣服への「憧れ」を抱かせ、モノに対する愛着形成の素地を醸成することを旨とした保育実践について報告する。

キーワード：伝統染色，探索活動，環境教育

1. 研究の背景

新しく改定された保育所保育指針、幼稚園教育要領ならびに幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、共通した幼児「教育」のあり方が明確にされるとともに、乳児からの発達と学びの連続性、そして小学校教育との接続の在り方が明示された。その上で、幼児教育において育みたい資質・能力を示し、幼児期の終わりまでに育てて欲しい「10の姿」が記されている。個性の尊重と個別の支援を前提とした、保育のなかでの指導・評価のガイドラインであり、幼小連携における双方がその情報を共有し、シームレスな幼小接続を図ることが求められている。

筆者らは、これまで日本の伝統染色のなかでも特異的に発展してきた藍染に着目し、年長児の年間プログラムとして保育実践を重ねてきた[1,2,3]。2007年度から11年目が経過し、2017年度からは異年齢保育が導入された環境下で新たな取り組みを始めている。この資産を基盤として、すべての発達段階に

染色活動を共通的なプログラムとして導入し、保育士・保護者・地域を巻き込んだ保育実践を構想し、子どものつぶやきなどエピソード記録を手掛かりに保育上の意義を検証している[4]。本稿では、探索行動が盛んになりはじめる乳幼児クラス(0・1歳児)での実践を報告する。

2. 実践の構想と内容

幼児期は「遊び」を通して外界への興味関心を広げ、直接的な体験によってのみ「実感を伴った理解」を促すことが可能である(図1)。すなわち、身近な環境に自らが関わることによってのみ、自然や人など、幼児を取り巻く世界を豊かな存在とすることができるのであって、その環境を具体的な生活(暮らし)として創造していくことが保育には求められている。

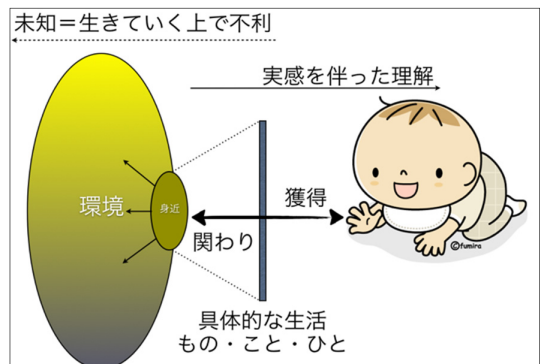


図1 身近な環境への関わりの概念図

[†] Kazuya SASAKI*, Izumi HONDA**, Sawako MASUBUCHI** and Atsushi KIMURA**: The Dyeing Activities Practiced in a Nursery School for Children under Two Years

Keywords: traditional dye, exploration, environmental education

* School of Education, Utsunomiya University

** Hidamari Nursery School

(連絡先: sasakika@cc.utsunomiya-u.ac.jp 佐々木和也)

乳児は概ね6ヶ月から、腕や手先を意図的に動かせるようになることで、周囲の人や物に興味を示し、探索活動が活発化する。そして、概ね1歳3ヶ月から2歳にかけて、身近な環境に自発的にはたらきかけ、歩く、押す、つまむ、めくるなどの新たな運動機能を獲得し、環境に働きかける意欲を一層高める時期である。このような発達を支援する染色活動の視点から次のような実践を行うこととした。

運動会（10月上旬）で着る自分たちのTシャツを染めるプロセスに発達段階に適した関わりを促し、染料となるドングリ（ツルバミ〔クヌギの古名〕の実）や染色工程に見られる不思議を引き出し、自分の大切な衣服という感情を芽生えさせ、モノ（Tシャツ）への愛情を育むことを目的とした。生命の尊重やモノへの愛着形成を考えると、図2に示すように安心空間の中で多様な愛情を受けて育つ乳幼児が、自らの意思で外界に関わりながら豊かな感性を育むことは、自分が受けてきた愛を他者に対して拡張していく行為でもある。すなわち、外界への接点（図中「伝統染色の窓」）を保育者が設定し、日常の散歩で慣れ親しんだ世界への興味を深めていくことをねらった実践である。

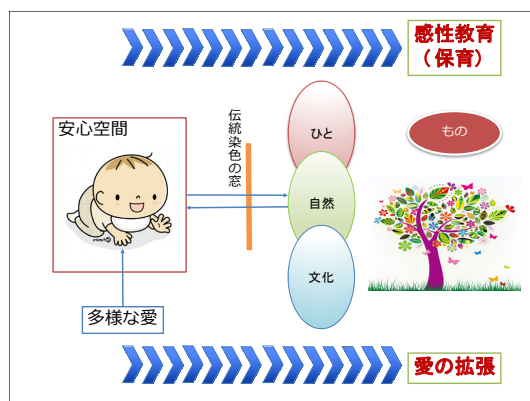


図2 保育実践の概念図

3. 実践経過報告 ―エピソード記録を交えて―

実践保育園では周辺に里山環境が豊かに残る地域に立地している。里山（雑木林）といえはクヌギ、コナラ、クリが代表的な木々で、こども達にとっては「ドングリ」が最も身近な自然の恵みである。その中でも、ひととき大きいツルバミが子ども達の宝探しの対象である。乳幼児クラス（夢組・大地組の合同クラス）の象徴カラーは「海老茶」で、しっかり大地に根を張って欲しいとの願いから「土」をイメージした色にしている。そうはいえ、生まれれば

かりの命の輝きも表現したいので、茜とツルバミで明るい赤茶色を染めることとした。

ツルバミ拾いは主に大地組、なかでも月齢の高い子ども達が集中して集める姿が多くみられた。とにかく沢山拾うS（2歳4ヶ月）は探索範囲も広く、「あ、これも！こっちも！みて！い～ばい！」と言いながら、ずっと地面を見ながら収集が続いていた。そして、保育園に戻ってくるやいなや「ツルバミ拾ってしたよ～！」と自信ありげに報告していた。



図5 探索範囲が広いSくん



図3 ツルバミ拾い（月齢の高い集団）



図4 ツルバミ拾い（月齢の低い集団）

この時期の子ども達では、高温での染色作業に関わるのは難しいことから、保育士が豆汁下地（染料の定着を促す前処理）をつくる作業を取り入れることを提案してくれた。豆乳を適当に薄めてジャブジャブお洗濯ごっこという作業風景。ツルバミ拾いでは集中できなかったM（2歳3ヶ月）にも立派に取り組む姿が見られ、お迎えに来た母親にその内容をしっかりと報告していた。活動に対する心象の強さ、自分の取り組みに対する自己評価が高いことが窺える。一方、夢組のY（7ヶ月）は豆乳パックを見つけるとハイハイで保育士に近づき、作業中はボウルの端をかじりながら、片手を入れて豆乳を触っていた。信頼関係のある保育士のもとで、作業風景を見ながら応答的に関わるという主体性がみとれる。前出のSの保護者によるエピソード記録に、『運動会Tシャツ、豆乳色に染まったね！染めはこれからだけど気合い十分！』と記されていた。大人では表現しきれない世界が新鮮であり、染色という概念ができていないからこそその感性表出である。このような世界観を乳児期には大切にしたいものである。



図6 豆汁の中でTシャツをジャブジャブ



図7 7ヶ月のYちゃんも一緒

そして、ようやく真っ白いTシャツを染める日。インド茜を煮出しているところに、乳児棟から嬉しそうにTシャツを運んできてくれた。乳児組の染色で

は、染料の匂いを嗅いでもらったり、水洗いのときに関わってもらう程度であるが、子ども達にはドラマチックな風景として刻まれているようだ。茜染めの水洗いの際、F（2歳1ヶ月）が桶の中から自分のTシャツを発見し、それを引き上げてまじまじと見つめる姿。嬉しさのあまり目をキラキラさせて「うわあ〜！」と声を漏らしたと同時に桶の中にダイブ。自分のTシャツが染まっていくことへの喜びを彼女なりに表現していたと考えられる。



図8 茜の染液を嗅ぐ



図9 茜染めの様子（中央女児がFちゃん）

数日後、いよいよ自分たちで集めたツルバミでの染色。前回と違って桶の中では真っ黒に見えるほどの茶色。茜色だったTシャツが徐々に変化していく様子をじっと見つめている姿があった。最後にはどんな色になるのだろうか・・・不安と期待が入り混じる瞬間である。8月途中入園で休みがちなH（2歳2ヶ月）が、水洗いのお手伝いをしている仲間達を見ていた。「Tシャツ赤いね～染めてるね～」と保育士が声掛けすると、「ん！ん！」と自分の着ていたT

シャツを掴んで引っ張ってみせた。そのあと、石で遊んでいた双子の弟に「な～！」と呼んで、腕を引っ張りながら染めている方まで連れて行き、自分の言葉で話している姿が観察できた。この記録に対して園長は、『自分の興味のあるものにどんどん引っ張られてしまう様子が見られることが多いHが、コミュニケーションに課題がある弟に伝えたくなくなるだけのドラマチックな活動であったということは明白。運動会の実態もわからないHにとっては、単純にワクワクする活動であったのだろう』と分析している。理屈ではなくて、自然現象として色が刻々と変化して行く様に、子どもが単純に感動できる世界観が草木染には潜んでいると考えられる。



図10 茜で染めた後にツルバミを重ねる

4. まとめと今後の展開

保育において「暮らし (=文化+生活)」を楽しむこと、日々の生活の中で連続的な展開をみせる体験を保障する環境を創ることが大切である。春に芽吹いた里山の木々の緑が日毎に深くなり、黄色や赤に紅葉した葉がサラサラと音をたてながら舞ってくる。冬の凛とした木々の立ち姿は決して死の世界ではなく、どこか生命の力強さや優しさを感じることができる。このような何気ない自然の営みを子ども達の学びの場に生かしたいという願いが、筆者らの染織活動の原点である。そして、工芸作家ではなく、子ども達と自然の色で遊び、暮らしを豊かにしていきたいと願う生活者であり、生活を創る者を意味するアーティストでありたいと思っている。特別な美術作品を創作することに秀でた人をアーティストと今日では呼称するが、生活のあらゆる要素が外部化していく現代社会、とくに原風景を刻み込む幼児期の教育において、この視点を丁寧に取り戻すべきである。ここに、個々人の発達に寄り添いながら「手間ひま」かけて色を生活に取り入れ行くことの意味

があるからだ。

本稿では、0・1歳児クラスでの取り組みについて報告したが、本実践は全てのクラスで実践を行ったものである。その意味で、発達段階を見通した実践と観察を行い、連続的な学びにどのように寄与していくかについて明らかにしていきたい。



図11 運動会当日のオープニング風景



参考文献

- [1] 佐々木和也, 神山晃一ほか: 生物多様性の視点を取り入れた藍染活動, 天然の色(天然染料顔料会議報告2013), pp. 4-11, 2014
- [2] 椎塚久雄編著: 感性工学ハンドブック - 感性をさわめる七つ道具 -, 朝倉書店, pp.222-236 (第3章『たもつ「3.7 環境」』), 2013
- [3] 日本子どもを守る会編著: 子ども白書2013, 本の泉社, pp.216-217 (X.『子どもと環境「土壌教育と環境」』), 2013
- [4] 佐々木和也: 〇歳からの草木染, SPINNUTS (特集: これからの草木染), Vol. 99, pp. 10-17, 2018

平成30年3月30日 受理

The Dyeing Activities Practiced in a Nursery School for Children under Two Years

Kazuya SASAKI, Izumi HONDA, Sawako MASUBUCHI and Atsushi KIMURA